

熟塾歴史探索ツアー

江戸時代の商都・大坂を支えた 豪商探訪ウォークツアー

案内：淀屋研究会・代表 **毛利信二氏**

日時：2011年5月22日(日) 午後 2

時~4時

大阪市役所前 鍋島藩蔵屋敷跡
堂島米市場 淀屋橋 淀屋の碑 淀
屋小路 山片蟠桃屋敷跡 大阪俵物
会所跡 天五に平五、十兵衛横町
鴻池善右衛門本宅跡

淀屋常安が開発した“中之島”をスタート!

前夜からの雨が止まない。朝目が覚め、窓の外
の空模様のご機嫌を伺うが、雨脚は強くなるば
かり・・・このどしゃぶりの雨の中を歩ける
だろうか・・・晴れ女の自負が押し流されるほ
どの雨・雨・雨。新緑の若葉を叩き付けるよう
な雨。ウォークツアーは諦めて、部屋を確保し
て座学にしようか・・・と戸惑っている間に、
お昼も過ぎて、集合場所の中之島の大阪市役所



前にたどり
着くと、雨は
止み、傘要ら
ず。今回は、
いつもの大
阪の街を視
点を変えて
淀屋研究会
の毛利さん
の案内で「豪

商を中心に江戸時代の街の記憶」を辿りながら
散策しようという企画で、唐津藩と福井藩の蔵
屋敷があった大阪市役所から、天下の台所と称
された江戸時代の大坂の街へタイムスリップ!
先ずは、ここは天下の台所大坂は、“中之島”。
この中之島を開発したのは材木商で淀屋の元祖
の淀屋常安であるといわれます。彼は大阪落城
のあとの元和年間(1615-24)に、あしの茂って
いた中之島を切り開き、後の蔵屋敷建設の基礎
を作りました。

江戸時代の中之島には諸藩大名の蔵屋敷が建ち
並び、延享年間(1744-48)に大阪にあった主要
蔵屋敷89のうち36が水運の便に恵まれた中
之島にありました。当時の中之島の東端は現在
の中央公会堂あたりまでしかなく、その付近に
備中成羽藩の山崎氏の蔵屋敷が建っていたので
この中之島の東端は「山崎の鼻」と呼ばれてい
ました。

現在のように中之島が天神橋までのびたのは大
正時代になってからのことです。明治維新後、
政府は蔵屋敷のあとを官庁、学校、病院などに

あて残りを民間に払い下げました。明治の終わ
りから大正にかけては日銀大阪支店(金沢藩・唐
津藩蔵屋敷跡)、中之島図書館(浜田藩蔵屋敷跡)、
中央公会堂(仙台藩蔵屋敷跡)、旧大阪市庁舎(唐
津藩・福井藩蔵屋敷跡)などの四大名建築とい
われる中之島を代表する建物を建てられました。
昭和46年に大阪市が市役所・公会堂の建て替え、
中之島図書館の移転などを内容とする「中之島
東部再開発構想」を発表します。これに対して
建築家、都市計画家、市民などから歴史的環境
保存運動が起こります。この運動は「中之島を
守る会」の結成につながり会の働きかけで始ま
った「中之島まつり」は、中之島の年中行事と
なって定着し現在も続いています。

浮世絵にも描かれた美しい鍋島藩蔵屋敷の白壁

大阪市役所から北へ。中之島と堂島を結ぶ大江
橋は、17世紀末に堂島新地が開かれた際に架
けられました。米市場に近いので、近辺には諸
藩の蔵屋敷が建ち並んでいましたが、大江橋か
ら眺める佐賀鍋島藩の蔵屋敷(現大阪高等裁判
所付近)の白壁は美しく、一珠斎国員筆による
「大江ばしより鍋しま風景」の浮世絵にも残っ
ています。江戸時代の大坂には各藩が米やその
他の特産物を売買し換金する蔵屋敷とよばれる
施設が多数あり、堂島川沿いに集中していま
した。佐賀藩の蔵屋敷はその中でも有数の規模
を持ち、このあたりは鍋島浜と呼ばれ、人々の憩
いの場となっていました。平成2年(1990)に実
施された発掘調査により、蔵屋敷の一部が発見
され、船を
屋敷内に引き
込む水門
や石垣が確
認されたた
のこと。

「佐賀藩蔵
屋敷跡」の
碑で写真を
撮り、川辺



に降りると、米などを積んだ船を屋敷内に引き
込む水門の遺構がありました。
かつてここに佐賀から蔵屋敷駐在の武士が派遣
され、大阪の商人や町人が出入りしていた...川
には絶え間なく出船入船が往来し“天下の台所”
と称された大坂の賑わいが見えてくるような気
がしました。今は多くの川が埋め立てられ、宝
船来航も望めなくなりましたのでしょか・・・。
出船ばかりを見送る街・大阪になってしまっ
た・・・中之島にかかる高速道路の太い橋脚だ
けがふんばっているようで、大坂に入船を迎え、
両手をあけて新しい人や文化を迎え入れる度量
と器と活力はどこに行ったのでしょうか・・・。
江戸時代大坂に蔵屋敷が集中したからこそ、豪
商と称される藩の商品や物産を取り扱う商人た
ちが台頭し、商都・大坂は全国の商品や情報が
集中する都市として栄えていったのでしょか。
富は川を遡ってきたのです。

淀屋の米市から世界初の先物取引“堂島米市”へ

御堂筋を西に横断して、新地に向かいます。ANAクラウンプラザホテルの近くに「堂島米市場の碑」があります。江戸時代米の取引は、当初蔵屋敷の連なる土佐堀川沿岸の、北浜の路上で行われていました。これを開いたのが豪商淀屋の2代目个庵（こあん）といわれ、そのため「淀屋の米市」と称されていました。その後、交通妨害になることや、当時開発されたばかりの堂島新地の振興もあって、この地に移転。（元禄10年、1697年）これは、淀屋の幕府によるとりつぶしの関係も考えられますが、いずれにしても公認のものではなく、米商人の自主的取引でした。その後江戸商人による公認の市場



開設などありましたが、享保15年（1730年）公認の帳合米市場が発足し、ここでの相場が全国の基準となりました。敷銀という証拠金

を積むだけで、差金決済による先物取引が可能で、世界でも初の組織化された先物取引市場がここにありました。

金沢・唐津藩蔵屋敷跡に建つ日本銀行大阪支店

碑の後ろの階段を上がり中之島ガーデンブリッジへ。1990年4月1日の花博開催に間に合わせるため表装工事は徹夜の突貫工事をし、4月1日午前4時頃に何とか完成したというパブルの申子ともいえる妙に幅の広い税金無駄遣いの橋の上にはモニュメントと江戸時代の大坂の絵図があるばかりで行人の影はまばら……。またまた階段を下りて、東に曲がると2008年にできた京阪電車大江橋駅（金沢藩・島原藩蔵屋敷跡）の駅地下1階の通路に大きな江戸時代・天保期（1830～43年）の「蔵屋敷配置図」の金属プレートには99藩の蔵屋敷が建ち並び、41の藩の蔵屋敷が中之島にあった様子が壁一杯に展示されていました。

またエレベーターで地上に出て大江橋南詰を御堂筋沿いに南にむかうと、江戸時代には島原藩の蔵屋敷があった日本銀行大阪支店前へ。日本で最初の郵便制度が設けられたのは、明治4年（1871）3月に、大阪・京都・東京間の開設され、この地に郵便役所が置かれていました。1903年（明治36年）には、東京駅や日本銀行本店の設計も手掛けた辰野金吾設計の日本銀行大阪支店前へ。辰野金吾は、肥後国唐津藩の蔵屋敷の足軽よりも身分の低い下級藩士の子に生まれるも、刀ではなく、その才能とその頭脳で工部大学工科大学（のちの帝国大学工科大学、現在の東京大学工学部）に1期生として入学。イギリス留学を経て、帝国大学工科大学学長、建築学会会長を歴任。設計の頑丈さから「辰野堅固」と呼ばれる建物を次々と世に送り、後進の指導にも尽力。辰野金吾の作品である中央公開堂や、奈良ホテルは、足を踏み入れた者に上質の空間と安らぎを与えてくれます。日常の雑念をその扉の外に置いて、彼の建物の中に居る時には背筋を伸ばしてゆったりと歩きたくなるようなりズム感が

あるのです。「良いものは時代を超えて新しい」という感動にも繋がっているのでしょうか。そして、奈良の東大寺の建物に祈りが込められているように、そこにはきっと、彼の設計図の中で輝いている西洋建築を実際に自分たちの手で建てるのだという新しい時代の扉を開けるといふ職人たちの高揚感と気迫が今も建物の至る所に漂っているからでしょうか・・・。

重要文化財の淀屋橋に淀屋の碑

更に南へ。淀屋が掛けた淀屋橋へ。現在の橋のデザインは、すぐ北側の堂島川に架かる大江橋とともに、1924年（大正13年）に大阪市の第1次都市計画事業で公募されたもので、鉄筋コンクリート造りのアーチ橋ながら、パリのセーヌ川を参考に景観に配慮したデザインは、一部補修された以外は懸架された当時のままの姿を川面に映し出している、このことが特に評価され、2008年には「大江橋及び淀屋橋」として、コンクリートの橋としては珍しく重要文化財に指定されました。

淀屋橋を渡り、西に向かう川べりに「淀屋の碑」があります。台石には、次の文が刻んであります。

『淀屋は江戸時代前期の大坂を代表する最大の豪商であった。淀屋の豪富と闕所のことはあまりにも有名である。淀屋の本姓は岡本氏、通称三郎右衛門。城州岡本の出身。辰五郎の称もあった。豊臣氏が天下をとるに及んで大坂に出て十三人町（今の大川町）に居し淀屋と称し、材木を商う。元和元年京橋一丁目の淀屋持地に青物市を開き、また米の相場をたてる。中之島を開発し、常安請地を開く。常安橋・常安町の名がいまにのこる。初代常安の長子（養子）喜入善右衛門、常安町家、齊藤町家の祖となる。次子（実子）常有五郎左衛門は別に大川町家の初代となり、言直から六代までつづく。心齋橋筋から西肥後橋の間にその宅地あり。その宅地内の小路を淀屋小路という。四十八戸前のいろは蔵有り。町人蔵元の元祖といわれたが、巨大なる米商人と目すべく、淀屋米市のために土佐堀川に自費で橋をかける。淀屋橋であり、こゝで行われた淀屋米市の盛大さは、この碑の絵が表現する通りであった。日本学士院会員 宮本又次 記』



淀屋小路に山片蟠桃屋敷跡

橋を渡り、御堂筋を南に行きドラックストアの壁に「淀屋小路」の看板が、これは淀屋屋敷の跡で以前淀屋という呉服商（淀屋と姻戚関係無）がありその壁に取り付けたもので、淀屋屋敷の南側の裏門があった道が今でも淀屋小路としてのこっています。

少し南にある山形蟠桃の屋敷跡で、明治時代から118年続いた愛日小学校跡に2008年に建設された「淀屋odoma」で休憩しました。

山形蟠桃は、江戸時代の商人であり学者。懐徳堂で朱子学を学びました。名前は、升屋の番頭をしていたことから「蟠桃」ともじったもので、本名は長谷川芳秀・通称升屋小右衛門。今の兵

庫高砂市の農家に生まれ、小さい時に升屋へ丁稚奉公に入り、若くして番頭として手腕を振り、傾いていた升屋の経営を軌道にのせました。財政破綻した仙台藩に建議し、差し米（米瓦内の米の品質チェックの為に部分的に米を抜き取ることを）を集めて利用し無駄を浮かせ、藩札を発行し金貨の金を節約し捻出させた資金を大阪で利殖に回し巨額の利益を上げ、仙台藩の財政再建を成功させると共に、升屋も仙台藩からの資金を回収することが出来たのです。升屋もその功績をたたえ、親戚並みに遇して彼に山片姓を与えました。商売に励む一方懐徳堂に通う等学問に励み、晩年には失明しながらも娘に口実で文章に書き起こさせるなどして、50半ばから著作にとりかかった「夢の代」を死の前の年に完成させました。山片蟠桃賞は、司馬遼太郎の提唱で大阪府主催で創設された賞です。

企業メセナの先駆け・商人よ学べ！の懐徳堂

山片蟠桃の屋敷から御堂筋を東に横断し、日本生命保険ビル南壁面に埋め込まれたように保存されている「懐徳堂の碑」の前に辿りつきました。江戸時代の懐徳堂（1724年～1869年）[編集]享保9年（1724年）、大坂の豪商たち（三星屋武右衛門・富永芳春（道明寺屋吉左右衛門）・舟橋屋四郎右衛門・備前屋吉兵衛・鴻池又四郎）が出資し、三宅石庵を学主に迎えて大坂尼ヶ崎町（現在の大阪府中央区）に懐徳堂を設立され、三星屋らは懐徳堂の「五同志」と称されていました。要は、江戸時代の商人は、社員研修なんてケチなことはない。どこのお店の者でも学びたい者があればどんどん勉強しなはれ！で、ただし無料・ただでは身につかん。それぞれの懐具合に応じて受講料は志としていただきまひよ。但し、仕事第一。仕事の都合で途中から参加したり途中退席もOK。先生は話をしているのに失礼な等とは言わない。至極合理的な塾を五人の旦那衆は開いたわけで、今でいう社会への企業貢献ってところでしょうか・・・。江戸時代の大坂では、懐が広い経営者が多かったわけで、そんな中から山形蟠桃などの町人学者が出てきたりと、伸び行く者は伸びなさい。企業の垣根を越えて切磋琢磨するなかで、大坂の教育水準は上がっていき、それぞれのお店も活性化するということでしょうか・・・。

明治維新の大阪経済お助けマン・鹿兒島生まれの五代友厚

更に、昨年緒方洪庵生誕200年で大騒ぎした「適塾」を過ぎ東へ東へ、北浜の証券取引所の手前には、「大阪俵物会所跡」に碑があります。江戸時代、幕府は金銀銅による決済に代えて、干なまこ、干あわび、干ふかひれなどの俵詰を輸出して、これらを「俵物」といいました。延享元年（1744年）に出荷の便のため会所が設けられ、移転を繰り返しましたが安永6年（1777年）に北浜のこの地に落ち着きました。証券取引所の前には五代友厚の碑が颯爽と街行く人を眺めています。五代友厚公は、天保六年（1835）薩摩国に出生し、薩摩藩に出仕しました。その才覚により早くから頭角を現し、欧州視察に派遣されるなど、海外事情に通暁するようになり

ました。明治維新後は、大阪で官職に就き、大阪造幣寮（現・造幣局）等の設立に尽力した後、民間に転じ、紡績業、鉱業、鉄道業などを幅広く手がけ、事業を大きく発展させました。こうして起業者としての側面を持つ一方、いわゆる大阪会議を主宰するなど、草創期の明治政府にも大きな影響を与えています。さらに、堂島米会所を復興するとともに、株式取引所条例の成立を受けて、自ら大阪証券取引所の前身である大阪株式取引所の発起人となり、その設立に尽力するなど、大阪の経済的基盤の構築にも熱心に取り組みました。また、大阪商法会議所（現・大阪商工会議所）を設立し、その初代会頭に就任するなど、商都大阪の発展に貢献し、我が国経済界における大阪の地位を著しく向上させたものと高く評価されています。

「天五に平五、十兵衛横町」(現私立開平小学校)

平野屋五兵衛家は、十人両替の一つに数えられる豪商で、1636年（寛永13年）の開業と伝えられています。当時、道を挟んで同じく十人両替の天王寺屋五兵衛家があり、このあたりは「天五に平五、十兵衛横町」と呼ばれていました。

天王寺屋五兵衛：江戸前期の大坂両替商の創始者。姓は大眉家。同家は摂津国住吉郡遠里小野村（大阪市住吉区遠里小野町）の出身。初代五兵衛（法名光重）の父吉右衛門（秀綱）は大眉家の元祖と呼ばれ、大坂今橋に移り住み、両替店を開き天王寺屋の屋号を称しました。

平野屋五兵衛：1623年（元和9年）の生まれ。本姓は大眉氏、名は光重。摂津国住吉郡遠里小野村（現住吉区）の出。遠祖は聖徳太子が四天王寺創建の際、用材の調達を命ぜられ、その時の功により「天王寺屋」の屋号を賜ったとのこと。父吉左衛門吉綱が大坂に進出、今橋に土木工場の店を構えたが、後に両替商に転じました。

そしてゴールは大阪美術倶楽部前へ。

鴻池善右衛門：(現大阪美術倶楽部)江戸時代の代表的豪商の一つである大坂の両替商・鴻池家(今橋鴻池)で代々受け継がれる名前である。家伝によれば祖は山中幸盛(鹿介)であるという。摂津伊丹の酒造業者鴻池直文の子、善右衛門正成が大坂で



一家を立てたのを初代とし、はじめ酒造業であったが、1656年に両替商に転じて事業を拡大、同族とともに鴻池財閥を形成しました。歴代当主からは、茶道の愛好者・庇護者、茶器の収集家を輩出。お疲れ様でした！近くのカフェでお茶して帰宅しました。

参加者：

塾生：秋山建人・池崎宗男・井上章・北原祥三・北原吉朗・中村京子・浜田真弓・原田彰子・平野康子・森欣子・米川俊信
一般：田村ちづこ・谷口康彦（敬称略）